

ごはん・お米とわたしの思い出

呉市立仁方中学校

一年

蔣

瑤

「ふわ」と炊飯器を聞けると白く熱い水蒸気が私の顔に向か、て吹きかけてきました。

私は、

「ごほっ、ごほっ、ごほおー」

と咳ごみしました。その後、お茶碗にごはんをついで、みそしるとハンバーグ、漬物と一緒
に食べました。食べる時に昔のことを思い出
しました。それは、今から六年ぐらい前のこ

とでした。その日は夏で、今日のようにぎら
ぎらと太陽に照らされていた日でした。

私は、中国のおばあちゃんの家に行きました。
そのときのおばあちゃんの家は、まだある小
さな村にありました。そして、自分たちの畑
もありました。とてもすてきな家でした。そ
んなある日、おばあちゃんに、

「私は、もうね、足、腰が悪くな、たから畑
が一人ではできないから、手伝っておくれな

い

と言われ、私は「心の中で、それくらい簡単
 だろう。すぐ終わるだろう。」と思っただので、
 「うん、いいよ。」
 と安易に答えました。
 畑に行くとき、ピーマンとトマト、なすやえ
 んどうまめ、稲などいろいろなものが植えて
 ありました。おばあちゃんは、早速、
 「まず、水やりをしてね。その次には、稲を
 植えるよ。」
 と言いました。私は、畑全体に水やりをして
 あとから水の量が足りないところにさらに、
 水やりをしました。とてもむしむししていま
 した。「野菜たちも暑いだろうな。」と思いま
 した。その後はおばあちゃんと一緒に畑を
 耕して、水を注ぎ込みました。とても冷たい
 水でしたが、どんどんぬるくなっていきまし
 た。この次に稲になる元を、決まるところにど
 んどん植えていきました。一時間三十分ぐら
 いほどの時間でやり終わりました。やり終わ
 ると「せんせん簡単なことではなかっただ
 んだ。」

おばあちゃんは今、こんなに苦労していたんだ。
 おばあちゃんは今、すごい人だな。と思います。
 た。初めて体験したこと。心は、半分楽しく、
 半分大変だなと感じていました。それから楽
 しく大変な日々を送っていたら、あ。という
 間に秋になりました。夏の間、植えた稲の元
 は、大きくな。て枯れていました。稲を少し
 こするとお米のような粒がい。ほい出て来ま
 した。おばあちゃんは今、
 今年はい。ほいお米が出来たわい。又し
 ぶりに見たのお。
 と笑いながら泣いていました。私は、虫や鳥
 などがいる中でも、こんなにできたなんてう
 れしい。じと思わずおばあちゃんのように泣き
 ました。その後、おばあちゃんと妹、私とで
 お米の外をこす。て洗い、最後に洗。た水が
 汚くならないようにする作業をしました。そ
 して、最後に炊飯器にお米と水を三対二ぐら
 いの割合で入れて、開始ボタンを押しました。
 私は、早く食べてみたいな。じと思いまし

た。すると、終わりのメロデーが流れられました。そして、お茶碗にごはんをついで食べました。とてもおいしくて思わず涙を流してしまいました。苦労するというのはこういうことなんだと思いました。

箸が落ちると共に私は、我に返りました。今も覚えている大切な思い出だ。たのしかったです。その時と同時にお茶碗の中のごはんもなくなっていました。

好きな思い出と好きなごはんを合わせるということは、新たな自分へ踏み出す一歩を作り出しているのだと思います。これからも過去の思い出、今の思い出、これからの思い出……つまり、ごはんの思い出……思い出を大切にしていきたいと思いました。また、苦労するということはどういうことなのか考えながら、生きていきたいと思いました。